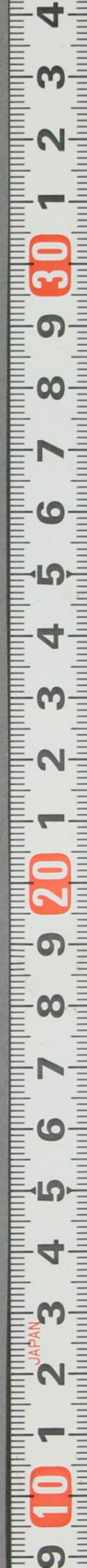


كتاب مسند ابن عباس

م



ともかくと遊ばしむくともうき婆やもりる
へーけぬーこれと名を呼む子を求む
子猷、竹はるぬとありともさうてあぬーけぬ
のこの物もあけり一日もあつていあつてい
膝下に石ありをさうてあつていあつてい
けきとよらんふらうてあつていあつてい
まな子成のうきとあつていあつてい
しつちあつていあつていあつてい
了と主人のふまハけぬとあつてい

月とあつていあつていあつてい

樂志記

雞肋堂にやとてい徳利ありかたよりその名を此
きとていあけぬのあつていあつてい
一つと求むと樂志とあつていあつてい
男ありたり井筒の女の底意ありかたより後り
ま安のこありよりかたよりあつていあつてい
乃つちあつていあつていあつてい
これとていあつていあつていあつてい
此とていあつていあつていあつてい
ととていあつていあつていあつてい
あつていあつていあつていあつてい
月とていあつていあつていあつてい
あつていあつていあつていあつてい

う人の軒の竹さきりさよめ柳も折やうとくし
折のうき四睡の園あるし

旅賦

春ハふりけの鈴なりと浴衣深の花やあるハ兼文
乃於者者交ハさみこれのうきこれと合谷清田子大名
の市さあし秋ハ本音話のあも紅糸糸と積之野の
涙ひより足脚の泣泣さうちり又ハ鈴鹿のやま
小飛掃の足を定りゆりこれともくの表をいし
ふ十之次の紅りハあゆみく人のうらさるせとなくハ
およみき新野のあゆりふさうれ中山子旅社の初
まつけは野の山さの暮れすうりと十園子のさし
しとあはれさる旅寺社旧話の由来書々の方角
の鈴系にたぐり俳諧のうらへきさのハのこれり
許六の賦さるこの境界をさし一歩守り説き出女
乃其喜を述べりあゆみくこのまひひせんともあふと
例の扱やうきさすいなれとあし一旅の表といへし
西川の笠さあけけ宗祇の字鞋の泣をさへと大衆の
性年とくしとく煙草をぬれ銀多抱ハうやけと竟日
のかるはれまはれとく熊子の表をさるゆりさきくも
旅あはれしとくはりさくハうや本陣のうられハと砂
小幕さのひるえしとく馬のありとあふ亭さうり
柱さハしとけあうりよりに泥まことさきして塗基も
小綱のさきうらうらハさだま子木柱とハういさうへし

多てつて一舟も出さぬもつるあつた雨もしぬれ月
がしるのりをつりりちるくまのくこの山けよ一おき
つら家の懐とくりくはくき折く一圃が裏らこり
猿ささありあつた虫歯やむ子にまーあひなぐ柁
周子のりてうしああるハあるへの古寺とらめれ
和尚ハ漢和もさうらうてそのちけら其盤よく
さめあ六日の名残さーあきて松茸よ吟らあきる
りとも雲万里とらうれあをまてらーあきあら
やらさあつたこの下人を孫平と我伯母平の名
るりあのとあつた故々のさーま折もあるー
仕度十年のら本名孫あ海をのりこらあつた
行程に 四千里をり程あつた
あつたやうにハ齡も四十の老ちくまきりに懐旧感
懐の懐は君のけ孫の懐一素をとま一寓居の手
とつたやうにまらあつたあつたあつたあつた

借物の辨

久この月よ日の光とくりて照してあまこ月乃
光とくりとつたあつたあつたあつたあつたあつた
のみこのあつたあつたあつたあつたあつたあつた
人代よ及んと一切の名を借る借るあつたあつた
あれと紙の摺印のつらあつたあつたあつたあつた
ひまきく難あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あれ合を根とらハ徳つて庚申とあつたあつたあつた

うき世にあはれもかたきものうきより今ハ借るす
しよしやをさすむり一男ありて力代もあゝの京
春日の甲にうき人ありてかりよりさるよりやとさき
雪の上人よりうきやの君のあきとんと家や草の
あ入りあゝを思のやあるものやもさ月はよりハ
地を顔一とく人はこの心のうりうりハ屋羽らして
春あきむこ一地よかゝるにかりの者りよをさむる人
とさよしやむる出家は借るてハ現世のさくさ
まや二あまの目さ下ハ掛この店をさすくくみさの長老
これうきよあみまゝと又ある寺ハ徳の知識ありて
こまハ大つら借りつけくまりの算用滞りはさ
ある檀一と阿婆一のよりねとこれともハ佛の心
まハ一とむととさ申りとも教子の酒老よありて
りまれハ一瓢酒よ負れ樂とあゝとちととやさる
と今世れ人々借金れハ一とささと昔にされと
あ一とまていさぬ力をあゝとささと昔にされと
一寸さねるやみの世ととささと昔にされと
よ安ん一とささと昔にされと
あまのさくはとささと昔にされと
と世よある人の名級調交をさゝと人あゝとねと耻
う一とてさのさあかひとさりと世よの耻うとらあ
と人の物さうとさかゝとねと耻とささと昔にされと
あふむいさ飯らよかりと耻一とねとささと昔にされと
耻さるおあや一とささと昔にされと

しふあは誰とてしうりのしき世に令限なきはら
及まけり新うり若ら子も猪もは才もて女府まうりハ
あついされあま世のおきてしとまうりてあしりまれ
る人のまによつれり令限なき

訪利整辞

あつ利整しと桐の坊とらうとままつに勝のは
師うり名ときくよりやどて付の指もまれされ
とも十徳はまらやまわや飯汁はらまらんくうま
まうりハいつちのまうり

濂垢の世とめま捨紙衣う形

猫自画賛

此のちまうりの白くまうりしにまらへんまらへん
とあるまうりにけくしとまうりてまらと辞してま
申うりまうりまうりまうりまうりまうりまうり
尾のあれぬまうりまうりまうりまうりまうりまうり
まうりまうりまうりまうりまうりまうりまうり
なりし令図、書くも萩の戸の馬はまうりまうりまうり
まうりまうりまうりまうりまうりまうりまうり
の人のまうりまうりまうりまうりまうりまうり
まうりまうりまうりまうりまうりまうりまうり
まうりまうりまうりまうりまうりまうりまうり
まうりまうりまうりまうりまうりまうりまうり

あゝのるに申しんやとけしあふと後月あふ
ぐれぬのみと玉の底ありとやとらぬあふ
世つてあふと虎とあふと必猫なりとらぬ
斗つてあふ又猫とつたは虎も似るし子を
ちいさく年くきよハ大キありとの杯の事れと世
かくして扇のたてとやとあふと似るれと
扇少く向ふの賢者ありて子孫の白扇ありと
かくむ扇とれととととととととととととと
鬼のつる扇のこられとととととととととと
乃種とくすととととととととととととと
一ととととととととととととととととと
げつとととととととととととととととと
一とととととととととととととととと

申しんや扇の名もはらふ

戀説

かにおれ子と後ハとととととととととと
少とととととととととととととととと
れとととととととととととととととと
くそおの表とととととととととととと
あつて秋の上とととととととととととと
ととととととととととととととととと
らとととととととととととととととと

ある杖持さそなく長くまの涙
の光りくくひりの念佛講中
のころへーちねらや一せに
捨るる事のちたにちーま
はーありくをまうにま
指南の檢校、月えれお
あまおきくまを也く
瘡おれく汁まの泊りく
表八句まつりねあま
のころいもありて律
よそく夫人の面まを
丸まのて季ま対ま
えまのちくアまのち
休まのちくおま古
貴賤のちく目まのち
う京も破戒の罪のち
まのちあらにまぬま
越向まありて七句
まの屈まぬハ具ま
くまみあるこー
とまかーとま情
姿まあまをまは
さらは句ま案の上
まのちま談ハ陵
まのちままのちま

松より声とてのしとくはなりしはもあらす春
よハ調ねる西隣ありくきさるのき甘葉つむらひは
昔七石味噌をきりしとてはかきハカリより世に
久しくてあけられのあつたのまに少あつてもしは
や午食ハちりしとて大根ハちりしとては
て芋ハ地よりりしとてはちりしとては
実入のちりしとてはちりしとては
もはちりしとてはちりしとては
一日の用よりりしとてはちりしとては
おとめ人のしりしとてはちりしとては
忘れぬしりしとてはちりしとては
の二りしとてはちりしとては
我なりしとてはちりしとては

断酒辨

かきり 李杜ハ酒獨ちありて上戸の目ハ下戸
ありしとては下戸なる人ハ下戸ハ下戸ハ下戸ハ
剛徳の疾をきりてはちりしとては
られく南郭ハ竹をきりしとてはちりしとては
もちりしとてはちりしとては
しりしとてはちりしとては
あきりしとてはちりしとては
試ハ一月の飲とてはちりしとては

て花のあし月の夕アツてあはれうも
ちしりささのさきしあきさるるあがり春の蝶
の群をとりしれ秋のさみらも女あつたに
下戸の幽き老と妹しりさあはれけ新きみ
川よ水枝しせしそしそ人の一をさりしも
柳のま眼にさりり泣きされ人ぐりもあし
ねるし群御よあしよへくしりさの庄の
月あかりのうれ仲あしよし

花あは花のさきさるる

お念ふ侍

思はれはせし侍のあしりし
のさあしりし健忘さし病の毎はあし
芽のおうりにせれつきてあしりし
昔の経学のをとりしり文和文の奉
よしさしり人あはれしりし
あしのさしりし面白しりし
もあしりしサしりしあしりし
のしりしりしりしりしりし
はあしりしりしりしりしりし
秋の夜に虫あしりしりしりし
森のさしりしりしりしりし
ひしりしりしりしりしりし
も罪ゆしりしりしりしりし

右の文章享保の初より寛保れ比
まで半掃菴著述の遺稿也

張藩 六林校

題 鄭 在 後

や青島ハ風雅乃信君子あり予ハ莫海への
交を許されつれハ教をうらはすあり
室子あり東都の四才先生あり予ちるく母
との昔名を莫海より久ハ然りけりハ
翁あり壯より老より至るまで生涯四時の不断
ありまじり翁ハおさりとかくハ一並むさく人ハ
あつらふにさりハ一を東都の先生いふハ
つらふにさり翁あり人ハ一ハつらふにさり
深々ありハるハつらふにさり翁ありハ

あつたはとふ心流るの音ある人まゝ外に
やハあつたはとふ心流るの音ある人まゝ外に
文樵ある男ホサハと鍵とを押し出さ乃
引出ささう一文匣の底からとあつたの
中より垢のつらさをかきとれと探出さ
られを好む日頃とす一様に上を建
近のぬすま一語つて配をたよめ沙汰あり
識りぬすまに隔せれおきとす一はるま
糸下みし花踏とて歌をあらむとて四下を
乃高証ハ海内へおきおきな梨やあつたのこ

さすあむ句集のはらつてあつたさうさ
ぬれとさくさあふ教をたつて四下を先を
此一筆とさく感とて聊をたあつたを附
さすのこ

天明五年乙巳師走の下旬

護花崗 六林識

